

に蓋あり、ふたにも兩にまど有、中は取手有て、緒通しのあな有、下に灰を入れて、おきをふたつばかり入れをけば、一日一夜きえず、ひるは上に衣衾をおほひて手をあぶり、膝をあた、め、よるは夜服の内に入て、終夜身をあた、む、甚だ老人に可なり、外をば紙にてはるべし、常の糊又玄ぶなどは離れやすし、大豆の煮汁のあめの如くなるを用、紙をもみ豆汁を糊として張るべし、この器湯婆はま温石を用るにまされり、物を書に、寒月手こ、ゆる時もちひてもよし、

〔躬恒集〕ひをけの銘

夢にだにねばこそみえめ埋火のおきゐてのみぞ明しはてぬる

〔枕草子二〕火をけすびつなどに、手のうらうちかへし、玄はのべなどして、あぶりをるもの、いつかはわかやかなる人などのさは玄たりし、おいはみうたてあるものこそ、火をけのはたにあしをさへもたげて、ものいふまゝ、におしすりなどもするらめ、

〔枕草子九〕おほきにてよき物 火桶

人のいへにつきぐしき物 ちくわうゑがきたる火をけ

〔枕草子春曙抄九〕ちくわうゑがきたる 竹鶯畫也、桐火桶などに、竹に鶯などゑにかきし也、

〔源順集〕天元二年十月初の亥の日、右大臣殿藤原兼家の女御、ひをけどもにもちひくだものもりて、

うちの女房どもにつかはす次でに、大臣殿にもひをけ一つ奉らせ給ふ、銀にてゐのこかめのかたを作りて、すゑさせ給へるに、くははれる歌、

綿津海のうきたる島をおふよりは動きなき世をいただけや龜

〔續古事談王道后宮〕後冷泉院御時、主殿寮焼ケル時、中大嘗會御火桶、元三ノ御クスリ暖ムルタ

タラナンド、世ノハジマリノ物、皆焼ニケリ、

〔今物語〕宇治の左のおと藤原頼長の御前に、銀をきり、火桶につませられて、頼政卿のいまだわか